書評

第102号
1993.4

●特集●
読書案内

書評編集委員会

『書評』102号●目次

特集●読書案内

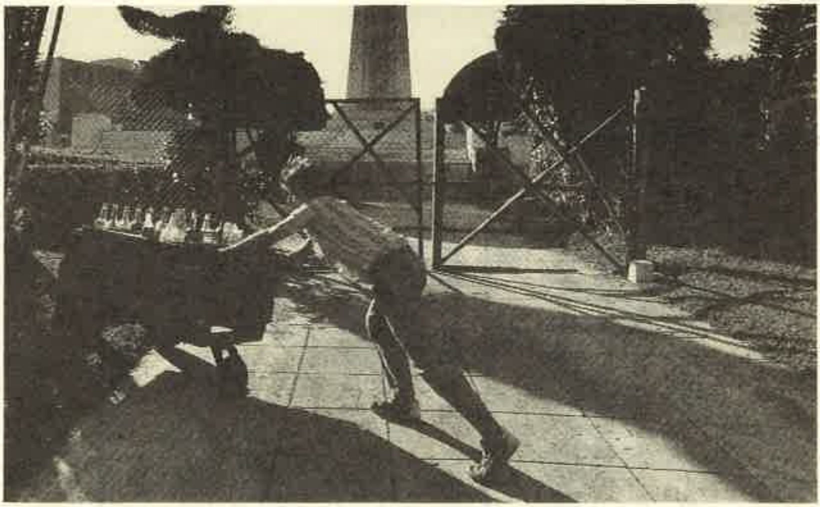
『書評』編集委員会より …… 4
インドで僕も考えた …… 孝忠　延夫（法学部教員） 6
アメリカ小説を読もう ——「知識」よりは「体験」を！ …… 中山喜代市（文学部教員） 8
読書三タイプ ——後悔先にたたず—— …… 丹羽　明（経済学部教員） 10
「二要因理論」 …… 廣瀬　幹好（商済学部教員） 12
読書のススメ …… 片桐　新自（社会学部教員） 14
気軽に読める本　三冊 …… 中野　正吉（工学部教員） 16

連載

日本中国ことばの来往（ゆきき）　その47 …… 芝田　稔 18
研究余滴　象徴主義　10　第3章　象徴主義運動
Ⅱ　運動の中の詩人たち　3、ギュスターブ・カーンとルネ・ギル …… 山村　嘉己 26
おいてけぼり——宮本輝試論　XIII …… 芝田　啓治 32
羅針盤 …… 2
編集後記

題字■網干善教（文学部教員）

1993.4　羅　針　盤



去る三月一六日、フォトジャーナリスト長倉洋海さんが、第一六回土門拳賞を受賞した。作品は〃マスード・愛しのアフガン〃である。

一三年に及ぶアフガニスタンの内戦の幕切れは、一九九二年四月二五日に訪れた。その内戦の中で、最も重要だったのが、ずば抜けた指揮能力と圧倒的な人望を持ち、「パンシールのライオン」と恐れられた、アハマッド・シャー・マスード、その人である。

長倉洋海さんは、合計三百日以上、何年にも渡って、マスードや彼の率いる戦士達と生活を共にし、アフガンの内戦の「真実」を撮り続けた。

何のために、彼らゲリラ戦士は闘っているのか、戦士達の一人一人が何を考えているのか、今の『ジャーナリズム』では、ほとんど知ることができない、と言っても過言ではない。長倉洋海さんは、「ニュースとして」おもしろい写真ではなく、背景と、人の生き様が見えてくるような写真を撮るべく、一人で駆けまわった。

だから、良い写真集ができたのだろうか？　おそらく、そうではないだろう。多くのジャーナリストがアフガンに行くが、その大部分は、あてがわれた部屋からほとんど表に出ず、マスードとのインタビューだけを待っているらしい。それでは何も見えてこないだろう。長倉洋海

さんは、マスードだけではなく、彼の闘いを支えている多くの戦士や農民たちと触れあっていた。その気持ちがあふれ出てくる写真集だから、「良い」写真集なのだ。

そして、私達は、マスコミの表層的な報道でまつりあげられた『英雄』ではなく、まさに、〝人民の英雄〟であるマスードを知ることができる。

一九五二年に生まれたマスードは、カブール大学工学部にすすみ、建築を学ぶが、王制下での貧富の格差の拡大や教育のたち遅れ、などを目のあたりにし、イスラムの理想に回帰する運動に加わるようになる。

一九七五年、マスードは大学を去り、パンシールで武装蜂起を起こすも失敗する。しかし、一九七八年、クーデターによって誕生したソ連の指導する革命政権が「共産主義化」を強行する中、マスードは再び二八人の仲間と五丁の銃でパンシールで武装闘争を開始した。

そして、マスードは三万人以上の戦士を率いて、ソ連に勝ちつづけ、ついには政府軍のほとんどが無抵抗でマスードの許(もと)に結集し、一九九二年四月には、イスラム国家としてのアフガニスタンが生まれた。現在マスードは国防大臣である。

不幸なことに、現在、ゲリラ同士が、権力闘争を展開し、ほんとうのところ、アフガニスタンに平和は訪れていない。

マスードは、『戦争が終れば大学に戻って勉強したい』と、ずっと言い続けて来た。彼は四一歳になろうとしている。でも、戦闘はまだまだ続いている。

大学で勉強していたマスードが、大学を去り、闘いを始めたのはなぜなのか。そこまで彼をつき動かしたものは何だったのか、私にはそこが気にかかる。もちろん、長倉洋海さんの作品で、その辺のことはもちろん描かれているが、マスードがふみ出した時の意志と、十何年にも及ぶゲリラ戦を耐えぬく精神力の根拠は、まだ、マスードの中に秘められたままではないか。

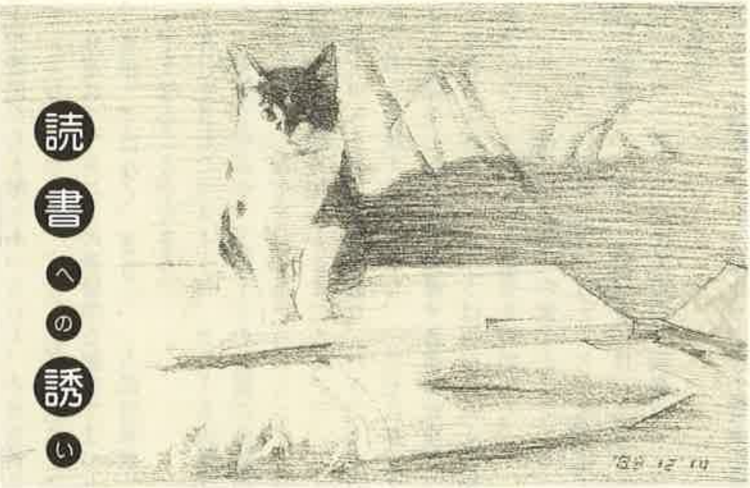
そして、それは、私達が、自分の生き方にマスードの生き方を投影させることによって見えてくるのではないだろうか。

マスードは、特別な人ではない。真面目な一青年であり、彼の闘いが彼をきたえ、成長させたのである。言いかえれば、私達の誰もがマスードになりうる。

今の日本が、決して良い国でないことは確かだ。新聞の投書欄を見ていても、それはわかる。しかし、今の政府を批判する私達は何者なのか？　一体どうするのか？

現状から一歩踏み出すことを決めるのは、私達自身だ。マスードになる可能性を、私達は皆、持っているのだ。

読書への誘い



ムダは〝美学〟だ!!

私事で恐縮ですが、中学生の時読んだ本は教科書を除けば、「ビルマの竪琴」と「一五少年漂流記」の二冊だけでした。高校に至っては一冊も読みませんでした。多感な一〇代にこれ程、本を読まない人間も珍しいだろうと思います。それが今、新入生の皆さんに読書への誘いをしようとしているのです!

当誌「書評」の編集委員会に入ってから、中学・高校の六年間で読んだ本の数十倍を上回る数をこの三年間に読みました。今思えば、本が嫌いだというよりは、むしろ本自体に対するキッカケがなかった、あるいは強制的だったの

読書案内目次

孝忠　延夫 …………………… 6
（法学部教員）
中山喜代市 …………………… 8
（文学部教員）
丹羽　　明 …………………… 10
（経済学部教員）
廣瀬　幹好 …………………… 12
（商学部教員）
片桐　新自 …………………… 14
（社会学部教員）
中野　正吉 …………………… 16
（工学部教員）

だろうと思います。

これからの四年間は無限の広がりを持つ可能性であるといえます。その中で蓄えていく知識は、社会で役に立つ、立たないという価値基準を超えて、生活の活動源となりうるはずです。

本には一個人のあるいは複数の考えが色々な経験に基づき、どんな形であれ表現されています。その作者や筆者の表現したいところ、つまりは主張ですね、そこを読み取り、それに対して自分なりの考えを持つ、それができてはじめて本のおもしろみが分かってくるのではないでしょうか。

「ムダな本を読むな！　時間がムダだから」とたまに聞きますが、そんなことはありません。「ムダは美学だ」と元京大教員、森毅氏調に本を読むことをおすすめしつつ、筆を置くことにしましょう。

（書評編集委員会より）

インドで僕も考えた

孝忠延夫
こうちゅう　のぶお
法学部教員
憲法専攻

モーニングコールを五時に聞いた。夜明け前バスでホテルを出発し、ガンジス河のガート（沐浴場）に向かった。小舟にのって対岸からの日の出を待ち、日の出とともに聖河ガンジスの水で身を浄め沐浴をする人々を視野にいれつつ、舟上で夜明けを迎えた。「聖なる」気分が、雑踏の中にまぎれこみ、帰りのバスに乗り込むと、朝のラッシュアワーが始まっている。バスの窓外には、タクシー、オートリクシャー（小型オート三輪車の後部座席を客席にした軽便タクシー）、リクシャー（日除けのホロがついた三輪自転車）、自転車そして多くの人々が行き交う活気あふれるバナーラス（ベナレス）の街があった。

ホテルに帰って落ちついてから、もう一度ガートまで行ってみようということになった。ホテルのフロントでタクシーを予約すると、ホテルの玄関にすぐタクシーがよこづけにされ、われわれは「上品に」タクシーにのりこんだ。街なかに入ると、タクシーのまわりをオートリクシャー、リクシャー、自転車が行き交い、人は急に跳びだしてくる。接触事故などはしょっちゅうではないか、と他人事ながら気になった。

のんびりとガンジス河畔を散策し、コブラをあやつる蛇つかいが吹いているエークタールなどを「買わされて」しまったりはしたが、気分良く帰途につくことになった。ホテルへの帰途は、オートリクシャーになった。当然二台に分乗するものと思っていたが、どういうわけか一台に五人乗ることになり、後部座席に三人、そして前の運転手の両側に二人乗れ、という。後ろに三人というのも窮屈ではあるが、悲劇的なのは、運転手の両側である。運転手の右側の「座席」（本当は「すきま」）を私が占めることになった。回転ハンドルではなく、自転車タイプのハンドルである。運転手に抱きつくように乗っていないと、手も足もはみ出てしまう。お尻の下にはエンジンがあるらしく、焼き玉エンジンの臭いがただよい、

お尻と足が熱くなってくる。すれちがうタクシーやトラックなどは、まさに「走る凶器」に感じられる。加えて、道路わきのガード壁なども強敵である。しかし、リクシャーや歩く人々などは比較的友好的に感じられ、接触しても「痛い！」ですみそうである。バスはとなると、まるで別世界の生き物に見える。文句をいっても、喧嘩をしても太刀打ちできそうにもない。

…と、書いたが、これも後から言えることであって、そのときは、ただひたすらホテルはまだか、と念じていた。われわれの乗ったオートリクシャーは、ホテルの前の公道までであり、間違ってもホテル内の広い敷地を走り抜け、玄関に横付けされることはなかった。

同じまちバナーラスをちょっと行き来しただけだが、そのまちを観る視点のおきどころの違いで、まったく違った世界が広がることもあるのだろう。インドでも、しばしばこのことを思い知らされた。

ところで、椎名誠氏は『インドでわしも考えた』で次のように述べている。「ロサンゼルスや香港へ行くということならばちょいとヒヤカシがてらのついで歩き、というようなな気軽さというものがあるが、インドとなるとどうもそのあたりが少しばかり違ってくる。『インドへ行ってカレー食ってターバン巻いて帰ってくるぜ』なんていうようなことを言ったりしたらたちまち日本国インド派哲人たちにケーベツ光線の十字砲火を浴び、ギャッと叫んで二メートルばかりころがってしまうような気配というものがなんとなくある。」そんなインドでも、椎名氏のように空中三メートルを浮揚するインド人を本気になって探してみるのもおもしろい。

＊　＊　＊

とりわけ新入生諸君は、一定の時間内に特定の問題に対する「解決」を出すことが良しとされる場合がこれまでは多かったと思われる。与えられた問題には、必ず「正解」が示されないと落ちつかない生活は、大学ではやめてみよう。講義でも、特定の学説と結論だけを覚えれば『優』がとれるようなものは、うすっぺらな学問だとわりきろう。だが、そのためには、多様な見解を取捨選択する力を自分でつけていく必要がある。

インドは、「多様性の中の統一」を模索している国といわれている。

アメリカ小説を読もう
――「知識」よりは「体験」を！

中山喜代市
なかやま　きよし
文学部教員
アメリカ文学専攻

いま、書店で「アメリカン・ベストセラー小説38」とか、「私の好きなアメリカ長編小説」という表題の本が店頭に並んでいる。これらの書の目次には、『開拓者』、『アンクル・トムの小屋』、『若草物語』、『トム・ソーヤーの冒険』、『オズの魔法使い』、『大地』、『風と共に去りぬ』、『仔鹿物語』、『かもめのジョナサン』、『ラヴ・ストーリー』など、それに『カラー・パープル』もある。

このように、名作の梗概や解説をしてくれる本はとても便利であるが、問題はそれを読んだところで、作品そのものを読んだことにはならないことである。ただほんの少し情報を得るだけである。ちょっとした「知識」としては手っとり早いが、それだけでしかない。実際に「読む」という体験がともなわないとなんにもならないのではないか。だから……

＊　＊　＊

ご存知ですか？　今年は「国際先住民年」だってことを。地球上の各大陸における先住民について、いや、先住民から学ぶ年なのだ。

「エスニック・グループ」あるいは「マイノリティー」系アメリカ人の文学がとりあげられることが多いが（五月の日本英文学会では「アジア系作家とアメリカ」というシンポジウムが組まれている）、世界各地の先住民を忘れてはならない（昨秋、日本アメリカ文学会で「ネイティヴ・アメリカンとアメリカ文学」というシンポジウムがあった）。北米大陸の先住民、アメリカン・インディアンは、昨今では「ネイティヴ・アメリカン」と呼ばれている。

ネイティヴ・アメリカン小説について、『書評』第一〇〇号で一編紹介したが、もう一例をあげると、邦訳で『悲しきインディアン』（晶文社刊、一九八二年）という小説がある。作家はレスリー・M・シルコウ。アメリカでは一九七七年に出版された。原題は「セレモニー（Ceremony）」なのに、「悲しきインディアン」となっているのはなぜか。ネイティヴ・アメリカンの歴史は「悲しい」

ものだったことは確かである。アメリカ合衆国の開拓史は「ネイティヴ・アメリカンの悲劇」の連続であったし、それはつまるところ、「アメリカの悲劇」にほかならなかった。だが、この小説は、あるインディアン青年の「悲しい」運命の「嘆き」や、それゆえの「抗議」だけではありえない。けだし、本の表題とは難しいものではある。

この小説の「セレモニー」とは、インディアンのメディスン・マン（「祈祷師・まじない師」）のセレモニー（儀式）、すなわち、民族固有の伝統、文化、ライフスタイルそのものを指している。

主人公のタヨはラグーナ族の母親と白人の間に生まれた混血である。彼は第二次世界大戦中、フィリッピンで日本兵と戦い、捕虜となったのち帰還したが、彼といっしょに志願兵となり、行動をともにした、いとこのロッキーは戦死する。タヨは叔母（ロッキーの母）に育ててもらったので、ロッキーと兄弟のように生きてきたのだった。自分の命よりも大切ないとこの生命を守ることができなかったタヨは、こころに深い傷を残すことになる。また、彼には、上官が「撃て」と命令したとき、日本兵の顔がなぜか叔父ジョナサンの顔に見えて、どうしても撃てなかったという記憶もある。

物語の冒頭において、このような過去が意識に流れているので、われわれ日本人がこの小説を読むとき、複雑な気持ちがからんで悩ましい。それはつらい体験でもある。かつての「失われた世代」が受けたのと同じようなトラウマ（精神的衝撃）が、エモの頭の深みに腫瘍のように癒着して、精神の歯車を狂わせ、彼は四六時中、泣いたり、吐き気をもよおすのである。軍医は「戦争神経症」だというが、医学や薬で治癒するような病気ではない。タヨが自分自身といかに忍耐強く取り組むかにかかっている。彼のアイデンティティ確立のためには「セレモニー」が不可欠となるゆえんである。

さらに、この小説のなかで、ネイティヴ・アメリカンの、ここでは、戦後におけるニューメキシコ州での悲惨な生活をつぶさに読むことは、読者にとってよりいっそう複雑な体験となる。

地球上の各地で、先住民はどのような問題をかかえているのであろうか。それは他人ごとであってはならない問題であるが、正直なところ、われわれの知らないことがあまりにも多すぎるのではないだろうか。

じっさいの「体験」とまではいかなくとも、せめて、本をつうじてでも「体験」することが必要であろう。

読書三タイプ
——後悔先にたたず——

丹羽　明

にわ　あきら
経済学部教員
金融論

新入生諸君を対象に読書案内をするといっても、そこには六学部の専門が異なる学生諸君がおり、私の専門と関連づけて話を進めるわけにはゆかないであろう。従って、一般的な取り留めのない話になりそうである。勘弁していただきたい。

さて、何でもまず整理をする私の性癖を容認してもらって、読書の目的というか意味を大きく分ければ、以下の三つになるであろう。一、専門分野のための読書。二、一般教養としての読書。三、即時的楽しみとしての読書。一は仕事のための、あるいは勉強のための読書である。これは明確な目的を持った、その達成のための手段である。その案内はそれぞれの専門家に任せるべきであろうからこれ以上立ち入らない。三は、たとえて言えば、マンガや恋愛小説あるいはポルノ小説などを読む場合を意味している。それらを読むこと自身が笑いとか好奇心を満たすとかの効用を得ているのであって、それ以外の目的ではない場合である。二は一と三の中間的なものすべてを含んでいる。「人間の幅を広げる」とか、「ものの見方を深める」といった、一ほど明確ではないが、遠い将来何らかの意味で「役に立つ」という程度の意味は持っている読書である。

もちろん、これら三つのタイプの読書の目的あるいは意味はものによっては、線引きが困難であったり、重なりあっているのは言うまでもない。とりあえず便宜的に、このように区別しておこう。三はいわば消費としての読書であり、一と二は将来に向けての投資としての読書といえるかもしれない。われわれは普段、これらを組み合わせた読書を行っているといえるであろう。

ところで、大学に入学する以前の読書はこの分類からすれば、ほとんど一と三のタイプであったと思われる。一は言うまでもなく受験のためのものであり、三は息抜き、あるいは気晴らしのためであろう。二のタイプの読書を十分に行うほどの時間的あるいは精神的余裕はおそらくな

い。ところが、この欄や他のところで教員が読書の薦めとして、取り上げるものはほとんどこのタイプのものである。また、読書離れが顕著なのもこれであろう。このタイプの読書が敬遠されるのはある意味では当然かもしれない。それは一のタイプと違って、明確な目的を持たず、三のタイプと違って、読めば即時的に楽しめるとは言えないからである。それが面白くなるためには、ある程度我慢をして読みつづけることが必要であり、それを読んだからといって、すぐ役に立つわけでもない。自由な時間がたっぷりあるとしても、ほかにやることはいくらでもあるからである。

二のタイプの読書を十分行うには、何よりもまず、自由な時間が必要であることは確かである。本を読む代表のように言われる大学の教員にしても（もちろん、個人差はあるが）、実際には二のタイプの読書はそれほど多いとは言えないと思う。私の場合、一のタイプの専門に関わる書物を別にすれば、二のタイプの読書は新書版程度のものを含めておそらく年間一〇冊以下であろう。確かに、一のタイプの読書はそれよりもずっと多いのであるが、飛ばし読みや、一部分を読むだけの場合も多い。いわば、それは大工さんが家を相手に仕事をしているように、本を相手に仕事をしているのであって、大工さんがノミやカンナを使い手入れするように、本を読み、集めているのである。われわれには、一般の社会人と同様、ゆっくりと読書そのものを楽しむ時間的余裕はそれほど多くないのである。思うに、教員が二のタイプの読書を薦めるのは、現在彼らがそうしているから、同じようにしなさいと言う意味ではない。むしろ、彼らが学生時代に二のタイプの読書が十分できたこと、そしてそれは決して無駄ではなかったから、あるいはその時期を懐かしんで、さもなければ十分読まなかったことを後悔してのことであろう。

結局、二のタイプの読書を十二分に行えるのは、人生の中でも限られた時期であり、それは大学時代である。この時期に読書の楽しみを味わい、本を読むことの癖をつけておけば、将来、忙しい中でも、短い時間を見つけて読書を楽しむことも可能であろう。どんな本を読んだらいいのかという問に対しては、どうぞご勝手にと言うしかない。

「二要因理論」

廣瀬幹好

ひろせ　みきよし
商学部教員
経営管理論専攻

　私は商学部で専門科目「経営管理論」の講義を担当している。受講人数（私の授業を受けることになっている学生の数）はここのところ五〇〇名を大きくオーバーしている（実際に授業に出てくる者は一割から二割の間なのだが）。年に一度、一月下旬に定期試験をおこなって成績を評価することになっている。九二年度は一月三〇日だった。

　学年末試験の採点をしていると、目にとまった答案があった。答案の裏面いっぱいに自分のこれまでの学生としてのあり方や授業についての感想を記してあった。一見したとき、「またか！」と思った。というのも、答案に設問とは関係ないことを書く学生が数多いからである。曰く。「一年間ありがとうございました」「先生の授業はたいへん興味深く、毎回出席しました」「就職が内定しておりますので、なにとぞ単位の方をよろしくお願いします」etc. このようなことを書く学生は、えてして試験は不出来である。くだんの学生のできは悪くない。私の科目の試験日が最終日に近く、彼にとっては学生生活最後の試験であったらしくよほど感慨深かったのだろう。そこで、設問の解答はそうそうに切り上げ、「大学生活とわたし」とでも言うべきテーマの小論文執筆の方に努力を傾けたようである。

　彼の「述懐」。先生方は学生が勉強しないとよく言われるが、例に漏れず自分も大学の成績は良い方だが遊ぶための金をえるためのアルバイトに毎日精を出し、授業を含め勉強に打ち込んだことはなく、先生方の批判はもっともであり耳が痛い。だけど、学生が勉強しないのは自分たちの怠慢に主たる原因があるとはいえ、先生方にも多くの責任があることをもっと自覚して欲しい。もっと魅力的な授業をして欲しい。

　この意見は学生たちの最も一般的な意見だろうと思う。また、十分に耳を傾けねばならない意見でもある。授業中私語が多くて授業ができないと私たちが言うとき、どれだけ私語

対策に真剣に取り組んでいるかをまず問直すことの方が大切だと思う。まず大事なことは、個人的に「おもしろい」授業になるように内容の工夫をすることだろう。声が十分に聞こえること、板書を見やすくすること、私語を黙認しない毅然たる姿勢も必要だろう。それだけでなく、一方通行的なマスプロ授業の蔓延を直ちに止めることなどの制度的措置も実施されなければならない。だが、これらの改善が真に学生をモチベートする（やる気をおこさせる）のだろうか。私の意見は否である。

アメリカのユタ州にある大学で心理学を教えているハーズバーグ先生は、有名な「二要因理論」を提唱した（私はこの理論がなぜか好きなのです）。この先生によれば、人にやる気をおこさせる要因には「衛生要因」と「動機づけ要因」の二つがある。「衛生要因」の衛生とは、病気の治療ではなくて予防という意味で、この要因が十分整備されていなかったら病気を引き起こす（私の話しではやる気を失わせる）が、それをいくら整備しても病気それ自体を治療する（やる気を起こす）ことはできないと言うのである。他方、「動機づけ要因」はやる気そのものを起こす要因である。たとえれば、大学の図書館が貧弱だと参考文献が揃っていないなどの不満が出るが、図書館はあくまでも学習意欲の環境条件にすぎないということなのであり、図書館を必要以上に立派にしたからといって学生の勉強意欲に積極的に寄与するものではないということである。例を加えれば、冷暖房の空調設備もまたしかりである。

先の学生の話しに戻ろう。すこし極端な言い方をすれば、授業は学習の「衛生要因」にすぎないのである。授業の不満はなるほど勉強意欲にあるていどマイナスの作用をするかもしれないが、他方で授業での感銘も一時的インパクトしか与えない。自分にも落ち度があるが先生の授業内容、あるいは姿勢が悪いので勉強しなかった、とでも言うべき主張は、あまりに主体性がなさすぎる。真に問うべきは、自らの姿勢であろう。

読書とて同じだと思う。良い本がありますよと聞いて読むもよし、身につくことも多いかもしれない。だが、私は自らの成熟度とともに読書があるのではないかと思っている。そう言いながらさして熟成もせず、人生の折り返し点を過ぎてしまったのだが。

読書のススメ

片桐新自
かたぎり　しんじ
社会学部教員

仕事が一段落して時間ができると、ぼくは大きな書店に行く。なにかおもしろそうな本が出ていないかゆっくりと探して回る。おもしろそうな本を見つけたら、目次を見て、中をぱらぱらと読み、気にいったら買う。時間に余裕のある時なら、こんなふうにして、あっというまに二時間くらいたってしまう。さすがに足が疲れてくるので、喫茶店にでも入って軽食とコーヒーを頼んで、今買ってきたばかりの本たちを取りだし、どれから読もうか、これもおもしろそうだが、こちらも捨てがたいなあなどと、楽しく悩み、とりあえず一冊に決め、読み始める。はじめの数ページで、こちらの期待通りの世界に引きずり込んでくれる本だったりしたら、それはもう至福の瞬間だ。このままずっとここで読み続けたいという気になる。この快感を知らずに人生を生きている人がいるとしたら、なんともったいないことだろう。暑い夏の、乾ききった喉に流し込む一杯のビールにも勝るのに……。

ぼくは「事実」を知るのが好きだ。昔はフィクションにも凝ったのだが、今はノンフィクションが圧倒的に多い。たまに読む小説も歴史的事実をベースにして書かれたようなものが多い。分野はなんでもいい。こちらの知的好奇心を満足させてくれるならば、どの分野の本でも構わない。大学の先生に期待される専門家のタイプとはほど遠いが、おもしろくもなさそうな専門書などと心中する気にはとうていなれない（もちろん、おもしろい専門書もある）。一回しかない人生だから、好きな本を読んで生きたい。広く浅くなったっていいじゃないか。そうは言いつつも社会学者としてのスケベ根性が顔を出し、広く知ることは社会学にとっては不可欠の作業だから、こんな読み方でもいつかきっとなんか役に立つよ、うん、そうだそうだと、こころの中でつぶやいている（本当は、高らかに「新百科全書派宣言」でもしたいところなのだが、なにせそう宣

言するには知識と能力があまりに足りない。せいぜい「こどもの図鑑派宣言」ぐらいができたらと思うのだが、最近はこどもの図鑑も馬鹿にはできず、これも難しいかもしれない……)。

世の中には疑問に思わなければどうということもないが、知ってみると実に奥の深い問題が無数にころがっている。例えば地名などもそのひとつの典型だろう。最近読んだ本でおもしろかったものに、『江戸東京まちづくり物語』（田村明著・時事通信社）という本がある。この本で長いこと漠然と疑問に思っていたことがたくさん解けた。たとえば、そのひとつは以前千葉県に住んでいた頃からなんとなく不思議に思っていた、房総半島の入口に位置する地域が下総と呼ばれ、その奥に位置する地域が上総と呼ばれていたという事実だった。普通、京からの距離の近いところが上（あるいは前）で、遠いところが下（あるいは後）の文字を含んでいるはずだから、下総と上総は反対ではないかという疑問だった。この疑問をこの本はすっきり解いてみせてくれた。長い間つかえていたものがとれたような感動を味わった。さらにその事実は、江戸という都市が家康が来るまで発達しなかった理由や、下町とか山の手という名称の由来、駒込、牛込、馬込、練馬、駒沢などといった牛馬に関連した地名が多く存在する理由なども説明してくれる。こんな常識みたいな事実を知っただけで感動するなんて、知っていた人から見ればお笑いだろうが、知らなかった人間からすればやはり感動ものである。本というのは、そうした感動を与えてくれるものなのだ（ちなみに、この事実を知らない人で、この文章を読んで気になった人は、この本を探して読んでみて下さい）。

気軽に読める本　三冊

中野正吉
なかの　まさきち
工学部教員
弾性波動論専攻

僕が工学部の教授であることから気立ての素直な人は、理科系の学問・技術を分かりやすくのべた啓蒙書の紹介などを期待していたかも知れない。たしかにそういう本にも中々面白いのがあって、是非一読をすすめたいものもなくはない。しかし本来僕は啓蒙書の推薦に余り気のりのしない質(たち)なので、今回は全く別な、もっと楽しい立場から三冊の本を挙げておくことにする。啓蒙書の推薦を避けたがるのはもともと僕の不勉強に由来する。僕は専門書ですら余程さしせまった必要でもないかぎり最後まで読み通すことなど滅多にしない。だから推薦するにも僕自体余り多くを知らないのである。無理にその一つを選ぶなら高校一年の頃に、オットー・テップリッツとハンス・ラーデマッハーという二人のドイツ人が書いた数学（数論やトポロジイ）の啓蒙書を読んで、この学問のエレガンスに痛く感激したことを憶えている。僕の数学至上主義（！）的人生観はこの時にできたのかも知れない。それが証拠にこの本の題名（もちろん日本語訳の）や出版社の名など全部忘れたが、著者の名だけは姓名ともに今でもはっきり思い出せるのである。

　さて僕が諸君にすすめようかなと考えるのは次の三冊の本である。まずその本を(1)表題、(2)著者名、(3)出版社名、(4)定価（円）、(5)発行年度（西暦）の順に書きならべて、最後にすすめる理由を簡単にのべておきたい。なお書きならべる順序には全く何の意味もない。もしもこれらの本のどれか一冊に興味を感じて、それが諸君の人間形成にほんの少しでも役に立ったなら僕としてはむしろ予想外の喜びであると云えるだろう。

＊(1)ベルギー公使夫人の明治日記
(2)エリアノーラ・メアリー・ダヌタン　長岡祥三　訳
(3)中央公論社
(4)二五〇〇円　(5)一九九二年

＊(1)わが友マキアヴェッリ（フィレンツェ存亡）
(2)塩野七生

(3)中公文庫
(4)八八〇円　(5)一九九二年

＊(1)エリザベート（ハプスブルク家最後の皇妃）
(2)塚本哲也
(3)文芸春秋
(4)二五〇〇円　(5)一九九二年

なお僕は音楽が好きだから、そちらの分野の本もよく読む。古くはスタンダールの「ハイドン、モーツァルト、メタスタシオ伝」、また最近音楽之友社から出たばかりのロッシーニ伝なんかも紹介したい本だけれど、クラシック音楽が好きでなければ無用の長物に過ぎないだろう。音楽好きの人には最後に「ランドフスカ音楽論集」（鍋島元子・大島かおり訳　みすず書房）をお薦めしておく。現代の音楽をフルに感じ取るための一助となることは間違いない。

諸君も御存知のように明治時代というのは、日本が他国に例を見ない程の速さで近代化に成功した時代だった。ダヌタン男爵夫人は明治二六年に公使の夫と共に来日、明治三九年離日するまで躍進を続ける日本に深い親愛の情を込めて書き綴った日記を残している。われわれはこの時代の日本政府を無やみに批判的に見たり、当時の国民の生活の貧しさばかりを強調した書物に出合うことが多いが、事実は青空みたいに美しく、エネルギーの溢れた一面があったらしい。面白いことには夜毎催される晩餐会や舞踏会の席で、日本の貴族や高官の夫妻たちのたたずまいは結構スマートだったことである。一つにはここまで近代化を進めた自負の念もあっただろう。それに比べて近頃ヨーロッパでお会いする日本の知識人と云ったら！

たしかに日本はアジアの一国で、それ故に近隣アジア諸国についてより深い知識と理解が必要なことは云うまでもない。けれど他方現代日本の文化の源はむしろヨーロッパにあるという事実も大変重要であろう。浮世絵とか禅よりも、ベートーヴェンとか共産主義という言葉の方に大低の日本人なら親近感が強いはずだ。

相手の文化を正確に知っている点では、平均して日本人大衆の方がヨーロッパ人大衆よりもはるかにすぐれている。しかし日本人には相手を良く、ヨーロッパ人には悪くとり過ぎる傾向がある。ルネッサンスというヨーロッパ的残忍さの最も栄えた時代と、ハプスブルク王家というヨーロッパ的優雅さの悲劇を演じ続けた一族とは、ヨーロッパを「感覚的に」理解するのに最適な材料だと僕は思っている。

連載

日本中国ことばの来往(ゆきき) その47

芝田稔

北京で開催されていた「第二回国際漢語教学シンポジウム」の会場で、非公式に打診されたことがある。それは旧漢字の新聞を創刊し、旧漢字しか知らない海外在住の中国人に対し、祖国の情勢を刻々に伝え、サービス宣伝を要望する海外華僑の参会者に応える『人民日報』の配慮でもあった。この要望を最も強く主張したのはアメリカの華僑であり、これに同調する東南アジア華僑も多かった。当時筆者も『人民日報』の記者から意見を求められたし、また『中国青年報』の記者からは旧漢字でカット用に使うため「漢」という字を毛筆で所望され、閉口したことを鮮明に覚えている。

この三年余りも疎遠にしていた『人民日報』の『海外版』を、また正月から読み始めることになった。そこで気付いたことを二、三述べておきたい。第一は紙面のさま変り、第二は改革開放、市場経済を反映する新語の出現である。

「旧漢字」から「簡体字」へ

この『海外版』は一九八七年一〇月海外華僑の切なる要望に応えて創刊されたものであって、今年はすでに六年目に入っている。この新聞については香港、マカオの中国への返還帰属が決まってから間のない八七年八月、

当時海外華僑で、このシンポジウムに参加した人たちの中には、現地の華僑が如何に祖国中国大陸の情況を知りたがっているかを力説し、しかも彼らは大陸で通用している簡体字が分からない、大陸から来る出版物は読めない、という矛盾を強調していたのである。

中国としては珍しい旧漢字による新聞――『人民日報・海外版』が創刊されたのは、そらからまもなくのことであり、一つにはこのような海外の要求に応えるべきだと情勢判断をしたからであろう。以来ずっと旧漢字の『海外版』が発行されていたのであるが、六年目に入った正月一日から紙面がガラリと変わり、これまでの重たい感じの旧漢字から明るい軽やかな簡体字の紙面となっていた。永年（ながねん）簡体字に接しているとそんな感触を受けるのであるが、知りたいのは、何故活字の変更が行われたかである。丸五年余の経験から出た決定であろうが、これは中国の漢字統一に懸ける執念の現れであり、海外に対してもいよいよ積極的に取り組む姿勢を示したものとして注目されるのである。

「下海＝シア・ハァイ」

中国の役所には無駄が多い、とよくいわれる。公務員になれば「鉄飯碗＝鉄の飯茶碗」にありついたことであ

り、事故を起こさない限り定年までは生活が保障される。この傾向は中央も地方の機関も、また工場や諸々の企業においても同様であるらしい。勤務時間中だけ職場におれば一日の日当になる、という甘い考えが蔓延すれば、開拓性も積極性も失われる。不満と怨みごとだけが歩き回り、三人寄れば無駄話を楽しむ、こんな風潮が改革開放の現在も尚抜け切っていないことが新語発生の背景であるらしい。

そこへ登場して来たのが「下海＝大海へ乗り出せ」という掛け声である。「下海」は…「個人にとっては自己の真価を実現し、その手腕を発揮することになるし、また国家にとっても市場経済の発展に貢献できるし、精兵簡政（機構を簡素化し少数精鋭で事に当たること）の実を挙げるにも役立つ」のであると説明し、さらに「ぬるま湯に漬かって無駄話をして日を送るよりも、大海原へ飛び込んで自分の力限り働くことの方が、国家のため自分のためになるのだ」（一月二七日付）と発破を掛けているのである。

「下海」ということばは、読んで字の通り〝海に入る〟。〝船の進水〟の他に〝素人役者がプロの役者になること〟を指すのだが、今はさらに引申して〝役人が終身雇用に安住せず、創意工夫をこらし、思い切って独立企業に参画して社会に貢献せよ〟というのだ。

この傾向は一部では積極的にやっているようだが特に大都市では先頭に立っているようで、教育界でも例外でない。上海のある大学では学内にホテル兼用のビルを建て、外国人訪問客のゲストハウスに当てたり、市民の結婚式の披露宴まで請け負っているし、また東北の工科大学では小は弱電器機の修理から、自動車の修理や研磨工場を利用して玉石の外注研磨まで堂々とやっており、学内での商業活動は学生、教員を問わずますます活発化しているようである。

「白条＝パイテアオ」

「条子＝テアオヅ」ということばがある。用件をメモした書き付けのことだが、一般的に受領書のことを「収条」というので一種の領収証であることに違いない。「白」には清らかの意味から空っぽ、無駄、むなしい等。「白字」は〝あて字〟のこと、「白水」は〝白湯（さゆ）〟。「白費」は無駄なことをする意味。

『海外版』（一月一五日付）に「兌換白条迎春節」と題したコラムがある。大都市近郊の農家では政府に対し、所定の物納した後の余剰農産物は自由市場で売買できるので現金収入には事欠かない。男手の多い家族などは、

耕作面積をどんどん増やし生産、収穫、販売等も親子兄弟水入らずでやっていけるので、見る見るうちに〝万元戸〟になって行く。これが「条件のあるものから先に豊かになればよい」という鄧小平路線でもある。

だが内陸の奥深い農村地帯の農家では、そうはいかない。彼らの現金収入といえば、政府の買い上げに頼るしかないのである。秋の収穫が終わった頃には、村役場の「収購＝政府の調達」が始まるのだが、右から左へと現金が動くわけではない。農民が手にするのは、現金ではなく政府が買い上げを証明する「白条」なのである。つまり、これは農民が持っている「欠賬条＝掛け売り、掛け買いをした時の商品代金の書き付けのこと」をいうのである。

今年の「春節＝旧正月」は一月二三日であった。一月一五日のこのコラムは、農民が所持している「白条」を早く回収して現金を持たせ、無事春節を迎えるよう、政府に配慮を促すためのコメントであったのである。

漢字の遍歴 (2)

「東」

『説文』によると「東」は第六篇上木部の次に別個に「東部」を設けて次のように解説する。

東ハ動ナリ。木ニ従フ。官溥説ク。日ノ木中ニ在ルニ従フ。

『段注』はさらにこれを敷衍する。

木ハ榑木（神木の意）ナリ。日ハ木ノ中ニ在リ、日ク、東。木ノ上ニ在ルヲ杲トイフ。木ノ下ニ在ルヲ杳トイフ。

一方「動」について第一三篇下力部において次のとおり解説している。

動ハ作ナリ。作トハ起スナリ。力ニ従フ。重声。

なお「作」（第八篇上人部）を見ると、

作ハ起スナリ。（『説文』）

作ハ為スナリ。作ハ始ムルナリ。作ハ生ズルナリ。ソノ義ハ別ナルモ略同じ。（『段注』）

これを要約すると「東」は「日」と「木」との会意文字である。したがって、同様の考え方をすれば「杲」「杳」の成り立ちも同類に属するので、一見筋が通っているのである。しかし、何故に『説文』は部首を異にしているのかが疑問である。即ち「杲」「杳」は「木部」に属し「東」は別個に「東部」を立てていることだ。この点『大漢和』①は「東、杲、杳」の三字を「木部」に入れており、これは『段注』の考えを是としたためであろう。

もっとも『大漢和』には諸説を掲載しており『白虎通・五行』を引用して…

東方ハ動方ナリ。万物始メテ動キ生ズルナリ。

これは「東」と「動」との字音がよく似ており、古代における声訓法である、とも説明しているが、解字として「按ズルニ日ノ出ズル所ナリ、日ノ木中ニ在ルニ従フ、会意ナリ。」と締め括っている。これはこれで筋を通しているので一見識であるが、それを鵜飲みにしてよいかどうか。というのは、漢字の祖先である甲骨文の「日」と「木」の字形と「東」の字形（図参照）を比べてみると、俄に信じられないからである。

仮りに「日」と「木」とが合って「杲」と「杳」の会意文字を作ったとすれば、それは十分に理解できる。しかもこの場合「日」と「木」のどちらかが主体性を有っているのかを考えると、この二字を『説文』や『大漢和』のように「木部」に入れるのは不適当であり、むしろ『新字源』②のように「日部」に入れる方が、字典の目的に合致しているといえる。「杲」と「杳」とは『説文』には〝親字〟として「木部」に入っているが、甲骨文の中には見当たらない。これは漢代に入って認定された字であることを証明したものであり、「東」を「日」と「木」の会意文字と認定したのと軌を一にするものである。

甲骨文の「東」は「日」と「木」との会意文字である

とは、どうしても考えられない。『甲骨文辞典』は・・

「東」は物を入れた袋の両端を縄できつく縛った形のようであって、橐の最初の文字である。甲骨文、金文ともに東方の〝東〟に仮借したものである。『説文』の説明は、後世書き表した篆書の字形から判断したものであって、正確ではない。

このように見てくると「東」という字を借りて、その字音が方角を表す「東」の音に近いことから借用したものであって、元来方角を表す「東」の字は無かったのである。袋を表す甲骨文が方角を表す「東」に借用されたのは、已に殷の時代からであり「東土受年」「東室」等の卜辞がそれを証明している。この甲骨文の書体が周時代に至って史官が用いた「籀文」（又は大篆）へと変遷し、さらに秦李斯が作った「小篆」の書体へと変化した。この小篆の書体こそ「東」は「日」と「木」の会意文字であると判断するのに好都合な字体になっていたからであろう。

「西」

「西」も「東」と同様に仮借文字であるが、この方が素直に理解できるのである。「西」を表す篆書体を見ると、鳥が巣の上で休んでいる形に見える。『説文』はこれを次のように解説する。（第一二篇上西部）

西ハ鳥ノ巣上ニ在ルナリ。象形。日西ノ方ニ在リ、而シテ鳥西ル。故ニ因ッテ以テ東西ノ西ト為ス。

『段注』は「下は巣を象り、上は鳥を象る。」とすれば「会意文字であるが、上下とも何れも字ではない。故に会意といわずして象形とする」と説明。さらに・・

上ノ西ハ、即チ東西ノ西ナリ。下ノ西ハ西ノ本義ナ

リ。

西の本義とは、羅振玉[3]によると「日既ニ西ニ落チ、鳥已ニ巣ニ入ル」という意味であり、日が暮れて鳥がねぐらについて休むことをいい「棲(すむ)」「栖(すむ)」等とも書く。

また王国維[1]も『釈西』の中で『説文』の解説を全面的に肯定して「甚ダ是ナリ」としている。

甲骨文の「西」は何れも鳥の巣の形状をしており、既に殷の時代から「貞西土受年」（貞(ただ)スニ西土ハみのりヲ受ル）の如く、方位名詞として用いられていたのである。

「南」

「南」の甲骨文は、下部は瓦器を倒置した形を象っており、上部はその瓦器を吊るす縄紐を示している、と解字されている。また「古代における瓦製の楽器である」（以上『甲骨文辞典』）としている。これも方角の南を表す仮借字であると考えられる。

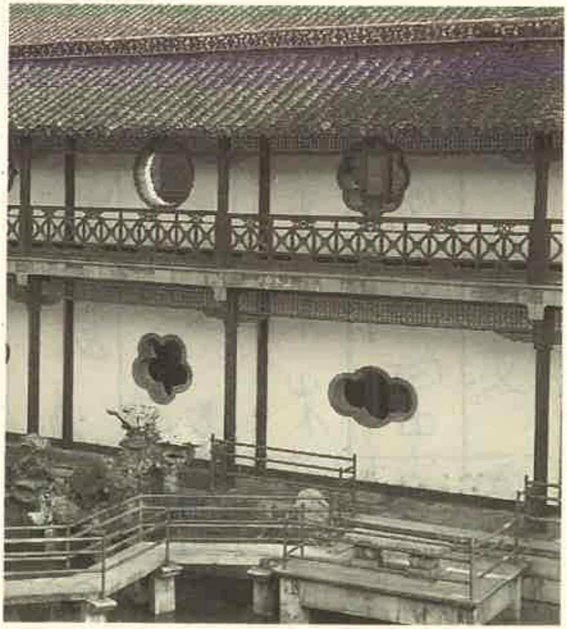
一方『説文』には…

南ハ草木ノ南ノ方ニ至ルヤ枝ノ任(まかす)有ルナリ。

とあり『段注』は「草木ノ南ノ方ニ至ルヤ、猶草木ノ夏ニ至ルト言フガ如シ」と解説する。つまり南の方角は太陽に恵まれて暖かいので草木がよく育つ状態を彷彿させるのである。（任ハ養フナリ『段注』）

また甲骨文の「南」は小屋を象形化し、草木で囲い暖かい小屋の中で促成栽培をするさまを示しているとする解字（『学研漢和』[5]）や家の中が暖かい意を表して〝みなみ〟の意に引申させている（『新字源』）等諸説粉々であるが、ここでは『段注』にある次の解釈を引用してその決着を付けておこう。

當(まさ)ニ南任ナリト東動ナリハ一例ト言フベシ。



「北」

「北」は甲骨文を見て分かるように二人が背を向け合って反駁しており、互いにそむく形を取っている。また互いに背にして逃げる形や寒い方角へ背を向ける等々の見方がある。

『甲骨文辞典』は…「二人が互いに背を向け合っている形で、引申して背中の背とする。又中原で建物は北側に建築するのが多く、北を背にして南向きとする。故にさらに引申して北方の北と為す」と解説する。

北方受禾（北方ニ嘉穀ヲ得ル）＝北は方角を示す。

『説文』には…「北ハ乖ナリ。二人相背ニスルニ従フ」とあり、『段注』はさらに引申して「軍ノ奔ヲ北トイフ」また「北トハ古ノ背字ナリ。又コレヲ引申シテ北方トナス」「北方ハ伏方ナリ。陽気下ニ在リ、万物伏蔵ス、亦乖ノ義ナリ」という。

注

① 諸橋轍次著『大漢和辞典』大修館・昭和三五年完成記念版。

② 小川環樹ら編『角川新字源』角川書店・昭和五六年版。

③ 羅振玉（一八六六～一九四〇）清末民初の考証学、金石学者、辛亥革命後京都に亡命し甲骨文の研究に専念、帰国後天津に居住、金石学に精通した。王国維の師。

④ 王国維（一八七七～一九二七）清末日本留学、帰国後蘇州で教員、辛亥革命後京都に亡命し、羅振玉に師事し金石学を治め帰国後清華大学教授。二七年六月国民革命軍の北京入城を前に昆明湖に投身。

⑤ 藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社・昭和五三年版。

（しばた　みのる・元文学部教員）

連載 《研究余滴》 **象徴主義 11**

第3章 象徴主義運動

Ⅱ 運動の中の詩人たち

3、ギュスターヴ・カーン（一八五九―一九三六）とルネ・ギル（一八六二―一九二五）

山村嘉己

1

先に挙げた二人の先達的存在に続いて、まるで群星のように多くの象徴主義詩人たちが溢れ出る。それはちょうど銀河のように星群としては明らかに一つの存在として輝き出るが、一つ一つの星としてはもはやあまり定かな光を残していない。それでも、そこからいくつかの些か目立つ姿を選び出すことは不可能ではない。そしてそれがその銀河群の全体を少しでも明らかにすることもまた十分に期待できるのではないだろうか。

先ず何らかの意味でこの運動の方法論的なものを導き出した人々がいる。中でもレミ・ド・グールモンがその著『仮面の書』のなかでつぎのように紹介したギュスターヴ・カーン Gustave Kahn を忘れることはできない。

《カーン氏は自由詩の創始者であったのか。自由詩は誰に負うのか。ランボーにか、その『イリュミナション』は一八八六年に「ボーグ」誌に発表された。あるいはラフォルグにか。かれは同じ頃、その同じ貴重な小雑誌――それを編集していたのはカーン氏なのだが――に《伝説》と《月のソロ》を発表した。そしてついにはカーン氏自身にか。そしてとくに忘れてな

らないのはW・ホイットマンで、かれの壮大な破格は当時ようやく味われ始めていた。》

一応、疑問体で保留的ではあっても、カーンが自由詩の世界に果した貢献の意義は十分認めている。もっとも自由詩ということば自体、曖昧な響きを消すことはできないが、たとえば、シュミットの『象徴主義』では《自由な詩行による詩は、リズムの不揃いな一連の音群を含んでいる。詩行はそれによって基本的な単一性をではなくて、詩節を構成する。詩節とは詩的感興に先立って存在している構造的な枠とか、詩の素材をゆっくり流し込むことのできる鋳型のようなものではない。詩節に均等性を与えているのは、それが示唆するあらゆる倍音により、あらゆる連想により豊かになり、時にはおぼろになってしまうただ一つの思想だけがそこに表現されているという事実である。》と述べ、このように自由詩は《結局、主観的な複雑さの結果、ある種の独自な様式に従って考えるというなんらかの精神状態の傾向を表現するにとどまる》と断じている。ことほどさようにはっきりと定義しがたいものなのである。事実つぎにあげるカーン自身の詩を見てもらいたい。

Gustave Kahn.
Caricature d'Ernest
Lajeunesse.

LE HALL DE FÊTE...

Le hall de fête, malgré les trèfles et les lys de lumière,
le hall aux musiques lumineuses —
s'endort en murmures une canzone de temps lointains —
le hall de fête est désolé malgré les présences nombreuses —
Sommes-nous dormants pour le lointain des temps.

Dans les brassées d'épis et les gerbes de fleurs de lumière
passe ondoyante la mascarade rayée de printemps —
Résonne à pas lourds en nous, le pas de bronze
le pas de conscience aux durs frôlis d'armures —
Dans les brassées d'épis joyeux et les tapis de fleurs lumineuses
sommes-nous dormants au miroir d'anciennes années.
Pourquoi crépusculaires vos yeux de fête, jadis l'ombre des midis —
Le hall somnole de triste enchantement,
les magiciennes pleurent le départ des amants
et les mages l'irréductible ballet de vos jouvences —
Pourquoi nocturnes vos cheveux sur le front, jadis éventails des midis

Ah voici le regret des midis et des soirs frais —

Te souviens-tu, les nuits lactées sur l'eau du fleuve —
les lampes du hall en fête tremblent comme des veuves —
Ah voici les mineurs des musiques de fêtes —
magies et magiciennes, âme du mage — ancienne journée.

（意訳「祭りのホール」
光のクローバーと百合の輝やく中で祭りのホールは暉ゆい音楽に包まれながら静かに古い時代のカンツォーネを聞き眠る。たくさんの物がみち溢れているのに、祭りのホールは物さびしい。ぼくらは遠い時代を望んで夢見ているのだろうか。

光の穂むらや花束の中を春の縞模様をつけて波打ちながら仮面舞踏会が通りすぎる。ぼくらの中でブロンズの足音が、甲冑の固い愛撫に包まれた意

識の足音が、重々しく鳴り響く、光の嬉しげな穂むらとじゅうたんの中で、ぼくらは古い年月に鏡を見ながら眠っているのか。

かつては真昼の影であったお前の祭りの瞳よ、なぜ今たそがれ色なのか――ホールはかなしい魅惑によってまどろんでいる。女魔術師たちは恋人たちの出発に涙し、魔術師たちはお前の青春の純一なバレーに涙する。かつては真昼の扇であったお前の額にかかる髪の毛が、なぜ今は夜の色なのか。

ああ　今真昼と爽やかな夕べが惜しまれる。おぼえているか、川面に乳状の花が降りる。祭りのホールの燈火は未亡人のように震えている。ああ、祭りの音楽の短調のひびき、男女を問わぬ魔術師たち、魔術師の魂、昔の日よ。》

《ある詩節のなかで、中世ふう、オリエントふう、またはギリシャふうのひとつのイマージュをよび起すやいなや、はやくも第二の詩節ではそれを消してしまって、前のに劣らず難解な新たなヴィジョンで置きかえるのである》と、シュミットがいう通りの展開が見られるのではないか。もっともこの詩の場合にはまだしもひとつのイマージュに統一されていて成功作の一つといえるだろうが……(シュミットはこのほかにヴィエレ＝グリファンとステュアート＝メリルを自由詩々人の名前をあげているが、かれらについては後にふれよう)。

2

詩を完璧な音楽という《芸術》にまで高めようとしたのは《サンボリストたち》のもっとも壮大な夢のひとつであったとしても、それを愚かなまでの素朴さで追求したのはルネ・ギル René Ghil 一人であった。ベルギー人の血をひくかれは六二年にノールのトゥールコワンで生まれたが、やはりカーンの『ヴォーグ』誌に関係し、サンボリスム運動の尖兵となった。八五年に『武器と血の伝説』という詩集を出したが、かれを有名にしたのはその翌年の『ことば論』(Traité du Verbe)であった。この論は後ほどかれがさらに科学的と誇った『科学的詩について』(一九〇九)でより発展的に扱われることになるが、とにかくランボーのあの「母音」のシステムを借りている。しかし、ランボーの天才的な宇宙論の反映である詩の灼熱はほとんど受け継いでいない。たしかに「世

界の《全的存在》を秩序づけ、統一している法則から暗示的に流れ出、しかも同じ《リズム》にそっているものでないかぎり」詩的作品は価値を持たないとギルはいう。いいかえれば「詩は宇宙の一般的法則から生じる特別な果実でなければならず、その法則はリズムそのものなのである」。そして子音と母音の特別な交錯によって詩は無限に音楽に近づく。この考え自身に大きな誤りはない。しかし、ギルの才能はランボーやマラルメの天才と比較するとき、その限界をいかにしても覆いかくすことはできない。母音の色が《Aは黒、Eは白、Iは青、Oは赤、Uは黄色》と異なるというだけでなく、科学的に基礎づけるという出張のなかで、結局はこの種の分類はその詩人の主観の表白でしかなく、各個人の才能のきらめきに過ぎないということが明らかになって行く。恐らくそれだけに、当時の星雲状態の詩的宇宙においては興味ある議論として歓迎されたのかも知れない。

なお、ギルは母音と色との照応より、さらに楽器とのつながりをも示唆する。やはりシュミットの文章によりそれを紹介すれば、

《ギルはハープがそのひびきのためにEの音と白色とに照応すると定める。というのは、それが至高の感情を生ぜしめるからである。また、情熱の燃え上りを表

現するヴァイオリンはIの音と青色とに対応する、赤い騒音を生み出す金管楽器はわれわれの魂にかち誇ったヴィジョンを与えるので、Oの音と対応する。他方、天国的な汚れのなさをよび起す美しいUの音を無邪気にフルートはうたうのである。オーケストラ全体の要約ともいえるオルガンの場合は、その絶対的な暗さによって、世界の深渕の闇と肉欲との感情を聞き手に伝達するために、それが押しつけるのは母音Aである。》

さらにこの試みは二重母音などにも及び

《二重母音IEとIEUは苦悩するヴァイオリンということになろう。OU、IOU、UI、OUIは険のあるフルート、AE、OE、INは天空を晴れやかにするハープ、OI、IO、ONは光栄ある金管楽器、IA、EA、OA、UA、OUA、AN、そしてOUANは荘厳なオルガンということになる》。

このような音と楽器の周囲にいろいろなハーモニー（時には苦く、時に甘く、時にはほっそりとした）に従って子音が群をなすので、ギルたち器楽編成派の詩人たちはこのようにして《読者に音楽と色彩とさらに語または語群によって提示される観念の三つの魅惑を得せしめようとした》（R・サバチエ）のであった。もっとも、たとえばつぎにあげるかれの詩がどのようにその理論を実践しているかになると話は別になろう。

Aux lézards de la muraille morne
Chante! mon violon enguirlandé de viorne ——
et dénoue, et noue d'un trémulé tumulte
qui se lutte d'amour et de vie, la neuve
danse des papillons haut-palpités! et danse
les points de l'air sautant dans la lumière immense:
mon violon gouttant-goutté d'azur qui pleuve!

（意訳、てっせん草を巻いたぼくのヴァイオリンは、暗い壁のとかげたちに向って歌いかける——そして恋と命をかけて戦う震えるざわめきを以て、高く羽ばたく蝶の新型の舞踏がつぎつぎとくりひろげられる。無限の光線の中に風の流れをとばしながら、雨にぬれる大空を味わいつくすぼくのヴァイオリン。）

この理論と実作との乖離こそが《象徴主義》をはかない運動におとして行ったものなので、この作業の無意味さを改めて味わいながら、さらにもう何人かの試みを追っかけてみることにしよう。

（やまむら　よしみ・フランス文学科教官）

連載

おいてけぼり

――宮本輝試論 XIII――

芝田啓治

十、〝おいてけぼり〟生甲斐を求めて（その4）

(5) 宮本　輝の場合

明治以降の作家の生甲斐について来たが、太宰治辺りまでは職業との関連性がかなり色濃く残されていた。鴎外や漱石の時代の職業観を一面では飛び越してはいるものの、太宰に彼らに対する一種の劣等意識が働いており、その呪詛から逃れられないでいたからかも知れない。

しかし、宮本輝らの戦後世代、団塊の世代となると更に職業観は大きく変化していく。今ここで、戦後生まれでかつ三〇歳前後に芥川賞作家となった五名について考

えてみたいと思う。

昭和二一年生まれの中上健次、二二年の宮本輝、高城修三、二三年の三田誠広、高橋三千綱の五名で、彼らは昭和五〇年から昭和五三年までの三年間にそれぞれ芥川賞を受賞している。五名の者は、もちろんそれぞれの道を歩み始め作家生活に入っていくのであるが、共通点としては高度成長と共に学生時代を過ごし、その翳りと共に定職にはつかず、ついたとしても短期間で止めフリーターとして食繋いでいたのである。彼らにとって職業とは、作家生活への繋ぎであり、糧を稼ぐものでしかなかったのではあるまいか。それは、必死で職業を追い求めた上で悪戦苦闘の末、文学という生甲斐を捜し出した鴎外や漱石とは全く違い、又裕福な家の支援の下で作家活動を開始した有島武郎や武者小路実篤、中原中也や太宰治とは異なる職業観なのである。

近年、文学賞なるものが出版社主催のものから始まり、地方都市主催のものまで数多く見られる。上記の芥川賞や直木賞のように既に半世紀以上にわたるものもあれば、ここ一、二年で生まれたものもあり、小説や詩、戯曲、児童文学、女流文学、推理小説とその幅も広い。又、芥川賞などの新人賞的な文学賞とは違い、年度毎に秀でた作品に与えられる賞も数多くみられる。明治の頃と比べれば大きな差であり、殆ど賞らしい賞がなく懸賞小説、論文が主流の時代とは少々趣を異にしている。文学というジャンルが後ろめたさを感じずに済み、かつ表舞台に立ったという証拠ではあるまいか。そして、上記戦後生まれの五人の作家のうち四人までもが芥川賞受賞の前に何らかの文学賞を得ており、その受賞が不安定な作家への道を歩んで行くなかで、彼らの勇気づけとなった事は間違いのないところである。

高城修三は、芥川賞受賞のことばの中で次のように述べている。「新潮新人賞をいただいた作品で、今また芥川賞までいただいたからには、ひたすら頓首再拝、幸運と言うしかない。」と喜びを語り、又、三田誠広も同様「一七歳の時『Mの世界』という作品を書いた。自分としては遺書のつもりだった。たまたま〝学生小説コンクール〟というものをやっていたので、ポストに投げこんだ。佳作になって『文藝』誌上に掲載された。結局、遺書にならなかった。……自分は〝作家〟なのだといつも思っていた。遺書のつもりで書いていた作品が、生きることの支えになっていたのかもしれない。」と言っている。高橋三千綱も同様、受賞のことばで「群像新人賞を受けたと連絡したとき、『でかした!』と電話口で叫んだ父は、芥川賞受賞、の報告をすると『これからが大変だな』と

ぽつりといった。それから、よかった、ほんとうによかったと呟いた。」と述べている。宮本輝は「『泥の河』は昭和五二年に第一三回太宰治賞を受賞して、文字どおり、私の出世作となった。苦労して書いた作品だったし（苦労せずに書けた作品などひとつもないのだが）作家としての足がかりを作ってくれた大切な私の財産」（「泥の河の風景」）と言い、又「小説家になりたい、そして小説家としての市民権を得たい。その狂おしいほどの思いの底に、人々に勇気を与え、歓びを与え、感動を与えたいという、これまた一種狂的な野心をしのばせて、私は昭和五〇年、二七歳の夏に会社を辞めた。……俺は必ず芥川賞を取ってみせる。取らねばならぬ、そう自分に何度も何度も言い聞かせて日々が過ぎた。作品をひとつ仕上げるたびに、めざす地点はさらに遠ざかって行くように思われた。……だから、『泥の河』で太宰賞を、たてつづけに『螢川』で芥川賞を受賞したとき、友人の祝ってくれた言葉や、マスコミのインタビューに『運が良かったんです』と答えたのは、決して謙遜ではない。事実、私はそう思ったのであった。そして、私はこれで一生食っていけると思いこんだのも事実だった。」（「芥川賞と私」）

　このように、四人の作家の受賞前後の感想が素直に述べられている。純文学を目指す新人の登龍門となっている芥川賞の受賞は、やはり彼らの人生の転機となったと言っても差し支えないだろう。そして、〝作家〟なのだと自他共に認める契機ともなったのである。

　それでは、宮本輝と文学との出会いに立戻って、どのような歩みをなして来たのか追ってみたい。

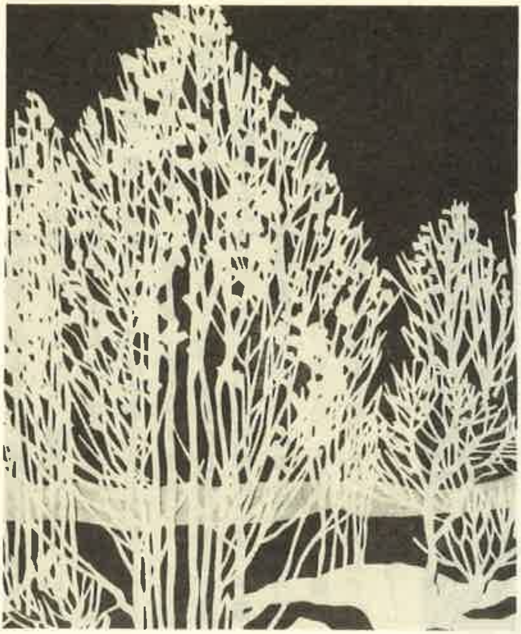
　「私が初めて文学というものに触れたのは、中学二年の終り頃である。井上靖の『あすなろ物語』であった。私はそれを押し入れの中で夜っぴいて読んだ。その頃の我が家は貧困の渦中にあって両親のいさかいも絶えず、

やはりそのためか、私もあらゆるものに幾分反抗的な、内にこもりがちな少年になっていた。酒臭い父と、いつもやつれた哀しげな顔をした母から逃げていく場所としては、六畳一間の借家では、便所か押し入れの中しかなかったわけである。」（宮本輝「押し入れの中」）

現実から逃れたい、その一心で虚構の世界に憧れ、飛び込んで陶酔するのであった。又、浪人時代には、予備校そっちのけで中之島図書館に通いつめ本を読み続けるといった一年を過ごしている。そして、宮本が二一歳の時父が死に、その父の残した借金を母と共に返済していかなければならなくなるのだが、やっとの思いで完了した時、自分の本当の生甲斐や職業について考え出すのであった。このままでいいのだろうか。こんな事をいつまでも続けていていいのだろうかと。一つの終了が達成感と一種の虚脱感をうんだのであり、次の自らの生き方を追求するいい契機となったのであろう。

「私は五年間勤めた会社を昭和五〇年の夏に辞めた。二七歳のときだった。その二年前から強い不安神経症というノイローゼにかかって、サラリーマン生活に耐えられなくなっていた。しかも私はずっと以前から小説家になりたいという夢があった。」（同「改札口」）

「雨やどりのため、一軒の本屋に入り、文芸雑誌を手



に取った。そして一篇の短篇小説を立ち読みした。短い小説なのに、最後まで読み切れなかった。おもしろくなかったからである。突然、真実突然に、私は小説家になるぞと決心した。俺なら、もっとおもしろい小説を書いてみせる。そう思ったのである。」（同「命の力」）

「その小説に織り込まれた人生の恐ろしさなど、日々汗水たらして世渡りしている庶民からすれば、じつにちゃんちゃらおかしい代物なのである。そんなことをわざわざ小説で教えてもらわなくとも、読者はもっと修羅場で息をしている。だから誰も純文学なるものを読もうとしなくなったのだと私は思った。何よりも〝おもしろく〟なかったのである。」（同「雨やどり」）

　その時、宮本が目指そうとする文学がおぼろげながら見え出したのである。世間一般では、文学を純文学と大衆文学とに区分している。芥川賞と直木賞の間にも明確な線引きがある。しかし、純文学が気高くて、上等で、大衆文学はただ面白いだけなのであろうか。そのような区分など本来文学には無いはずだと思った時、宮本には二人の先輩作家の顔が思い浮かんだのではあるまいか。

　その一人は「やさしくて、かなしくて、をかしくて、気高くて、他に何が要るのでせう。あのね、読んで面白くない小説はね、それは、下手な小説なのです。」（太宰治「『晩年』について」）という言葉を残した太宰である。文壇に入り切れず、文壇を横目で見ながら、時としてはサロン小説だとして噛みつき、自らの道を最後まで進んで行った孤高の姿に憬景の念を抱いたのではあるまいか。しかし、家庭環境も出発点も、生き方も全く違う太宰とはやはり異質なものを感じたに違いない。（書評九三・九四・九七・九八号）

　その点、〝貧乏に立ち、その中からの出発〟をはかっ

た山本周五郎とは多くの共通項を持っており、より近しい存在として宮本には映ったのではあるまいか。

山本周五郎は、一九〇三年（明治三六年）生まれ、太宰より三歳上だが同世代と言えよう。しかし、彼の生活は太宰とは違い赤貧の連続で、小学校を出てすぐ山本周五郎商店（質店）に住込の徒弟として働き始めるのであった。しかし、関東大震災で店は罹災し、山本も職を失う。その後も地方新聞社、雑誌社の記者と職を転々とかえ、二三歳の時「須磨寺附近」を書いたのが、この道のスタートと言えよう。この直後の浦安での生活も、経済的には苦しいが、心に余裕を持ちつつ一人者の生活と作家としての生活をおくった姿が後の「青べか物語」となって結実している。又、その後も「或るとき、私は家人の箪笥をあけてみて、自分の軀が唐竹割りにされたようなショックを受けた。彼女の母親から譲られたその古風な箪笥は、五つある抽出の全部がからっぽになっていたのである。」（山本周五郎「からっぽの箪笥」）といった経験をしている。彼は生活のために映画脚本、娯楽小説、少女小説、推理小説と幅広く書いているのが、一つの特徴とも言えよう。そして、遂に苦労が実り四〇歳の時、「日本婦道記」で直木賞に推されたのである。しかし、辞退。二〇年近く、日の当たらない所で、又貧困と戦いつつも決して負けなかった彼の心意気が感じられる出来事である。自分の登りたい山のイメージはあるものの、どの道を選び、又無い時は獣道を自らの足で固めつつ登って行かなければならないのである。紆余曲折しつつ、自らの闘いと生活の戦いを展開していくのであった。

「およそ、四四、五歳になってから、小説には純文学も大衆文学もない、という足場を私はたしかめることができた。」（同「すべては『これから』」）

この二〇年間の歩みは、その後の彼の作家活動を推し進めていく上で必要かつ不可欠な経験であったと言えよう。誰も真似出来ぬ、自分だけの道。そんな強さを二〇年の間に作り上げたのであった。

「読者にとっては、自分の読んだ作品がおもしろければいいんであって、作者がだれであろうと、いっこうに知ったことじゃないんだ。」（清水きん「夫山本周五郎」）という言葉が口癖であったらしい。又、「私はむずかしいことは知らない。芸術性などということは本当にどっちでもいいので、その小説に作者の『書かずにいられないもの』があり、読者にもう一つの生活を体験したと感ずるくらいに、現実性のある面白さがあれば上乗だと思う」と山本周五郎は言う。

四〇になって、ある程度の自信の上に、かつ今まで歩んで来た道に間違いはなかったのだという信念の上に、彼の文学が開いていくのである。

宮本輝は、この山本周五郎を次のように述べている。

「氏は書くごとに成長した。文章も、主題も、眼力も、さらには氏の演歌までも成長した。それはおそるべき執念と錬磨を氏に課したことだろう。……いかに文学史の中に名をとどめようと、いかに一時期隆盛を極めようと、名だけ残して作品は残らずという作家の方が多い。だが、死後、幾十年、幾百年とその作家が民衆に愛されつづけた作家は日本に何人いるだろう。おそらく山本周五郎は、そのような作品を遺した作家である。」（宮本輝「成長しつづけた作家」）

このように太宰が純文学の道を歩み始めて辿着いた頂上も、又山本周五郎が大衆文学の道を歩み始めて辿着いた地点も、殆ど大きな差がなかったのではないだろうか。太宰が第一回の芥川賞を取り損ねてから四〇歳で死ぬまでの一三年間の作家活動と、山本周五郎が四〇歳で第一七回直木賞を辞退してから死ぬまでの二三年間の作家活動とは、同じ山、同じ山頂を思い描いていたように思われる。そして、宮本輝も彼らが登った山を見つめているのだろう。

「大衆文学だって、山本周五郎さんや司馬遼太郎さんも大衆文学なら、ほかにもいろいろありますし、純文学といえどもいろいろあるわけでしょう。だからぼくは純

文学、大衆文学というのはあまり考えたことがない。じゃあ『赤と黒』だって『アンナ・カレーニナ』だってみんな大衆文学じゃないかと思うわけです。（同「業の深い仕事」）

「いまの作家たちは、自分の心から花をつくろうとか、自分の心から月をつくろうとしていると思う。だから小説がおもしろくないんです。だからどうしても迷路に入っていかざるを得ないでしょう。ぼくはその逆だと思っているから、わりと『おれは観念なんか信じない』なんて、不遜なことをね。」（同「物語の復権」）

太宰も、山本も、そして宮本も〝面白い小説〟という言葉を使い、面白い小説であれば上手だし、面白い小説であれば作家が誰であっても一向にかまわず、そして宮本は「ぼくは人に勇気を与えたい、喜びを与えたい、陶酔を与えたい、感動させたい」（同「阿闍世の世界としての現代」）と続いていくのである。小説はあくまで太宰の言うように「芸術の美は所詮、市民への奉仕の美である。」（「葉」）となるのである。

その立脚点に立って、宮本はどの道を辿って山頂を目指すのであろうか。

太宰治賞をとった「泥の河」、芥川賞受賞作の「蛍川」から「青が散る」、「幻の光」、「星々の悲しみ」そして川三部作の最後「道頓堀川」、更に「錦繡」、「夢見通りの人々」、「春の夢」、「流転の海」などが昭和六〇年までに書き終えている作品群である。書き始めて一〇年の歩みと言えよう。これらの作品群は、太宰治賞、芥川賞の一つの流れの中に属するものと言える。もちろん宮本にとっては、純文学も大衆文学もないのだが、しかしどちらかと言えば前者にウェートがかかったものと言えよう。

それに対して、昭和六〇年以降に完成する朝日新聞連載の「ドナウの旅人」から「優駿」、「避暑地の猫」、これも新聞連載の「花の降る午後」、「愉楽の園」、「海辺の扉」、毎日新聞連載の「海岸列車」、「彗星物語」、「ここ

に地終わり　海始まる」に至る作品群は、明らかに昭和六〇年以前の作品群との違いが見られる。それは、昭和六〇年以降はストーリーを追う仕立てになっており、作品の中には少々荒いものや、表面だけが流れていくものもある。筋立てに無理があったり、奇想天外な部分も見受けられる。特に、「花の降る午後」「愉楽の園」、「彗星物語」などは、少々苦しい面がみられる。それは又、別の機会に考えてみたいと思う。

しかし、宮本の作品ほど映像化されているのも稀なのではないだろうか。それは前期後期を問わず数多く、「泥の河」に始まり、「蛍川」、「道頓堀川」、「夢見通りの人々」、「優駿」、「花の降る午後」、「流転の海」などが映画化され、又テレビでも「道頓堀川」や「避暑地の猫」などが放映された。それは、宮本の作品がストーリー性があり、映像化しやすいという点はやはり否めないのではないだろうか。けれども、マスメディアにもてはやされ、作家が作品以外で活躍するというのも限度があろう。作品の映像化が一層進み、コマーシャルにまでのってしまうというのは如何であろうか。作家が作品以外で活躍の場を求めるという事に、我々は余りいい例を知らないためである。杞憂に終われば幸いだが。

「いったい私たちはどうして小説など読むのであろうか。いったいそこに何を求めているのであろうか。千差万別であるのは論を持たぬが、そこには、ある無意識な希求が潜んでいるに違いない、それ忘我である。感動である。陶酔である。知的探究心とか、観念への埋没とかの欲求は、芸術の発生において二次的なものであった。その一次的なものと二次的なものとがすりかわったのが現代という歴史の持つ毒である。」（宮本輝「成長しつづけた作家」）

「小説というのは結局、物語なのだ、と書き始めたときからずっと思ってきました。学問でもなければ宗教でもない。贅沢な心の遊びだと思っています。物語をいかに織ってゆくかに懸命になるタイプでして、観念を文字に移すことはできないのです。逆にいえばぼくは、観念なんかまったく信じてはいないということにもなります。」（同「華やぎを縫いとる」）

宮本が太宰や山本周五郎の立った山頂を常に意識し、触発され続けて行けば、必ずや自らの頂上を見出し得るのではないだろうか。〝おいてけぼり〟の苦悩を乗り越え、父から人生を学び、先輩作家から又文学の何たるかを学びとれば、自らの生甲斐に向かって、又これを携えて歩み続ける事が出来るのではないだろうか。

（しばた　けいじ・本学部経済学部卒業生）

編集後記

書評一〇二号をお届けします。

まず、新入生の皆さんへ挨拶をしなければなりません。始めまして生協組織部「書評」編集委員会です。これからの4年間、短い間ですが、どうぞ宜しくお願いします。そして、「書評」を愛読している方もよろしくお願いします。

さて、昨年からお知らせしている「書評」賞の件ですが、我々の不手際により、誠に申し訳ございませんが、その発表は次々号（104号）で行いたいと考えております。応募者の皆さんには本当にご迷惑をおかけしております。

また、今号掲載予定の、石尾芳久先生の追悼特集と池田浩士氏の「故編追望」ですが、日程の折り合いが着かず、次号に送りたいと思います。誠に申し訳ございません。

季刊『書評』　1993年4月　通巻102号

編集·発行　関西大学生活協同組合・組織部『書評』編集委員会
連 絡 先　吹田市千里山東3-10-1（☎388-1121〈内線4821〉or 387-9998）
頒　　価　250円